



訪問型見守り事業
「子ども宅食」の狙いと具体的な取り組み

2023年9月
一般社団法人こども宅食応援団

目次

1. こども宅食とはどのような活動か？ (活動の外形)

2. 親子を取り巻く社会構造とそこから生まれる課題

3. 事業の目的： 利用家庭に生み出したい "変化" (成果)

4. 支援施策としてのこども宅食の特徴 ~「対面」×「訪問」型の特徴・強み~

1. こども宅食とはどのような活動か？ (活動の外形)

こども宅食とは？

様々な形で困りごとを抱えている
子育て家庭に、**周囲には知られない形で**
定期的に**食品や生活用品を届ける活動**のこと。



宅食=つながるきっかけ

定期的な食支援をツールに
つながりを作り、
子育て家庭を伴走しています

事業イメージ：集めた食品を定期的にお届け。声掛けをしながら、その後の相談などにつなげる

食品確保・保管



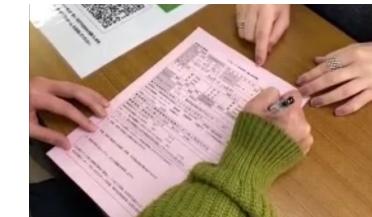
配送準備・梱包



配送・見守り

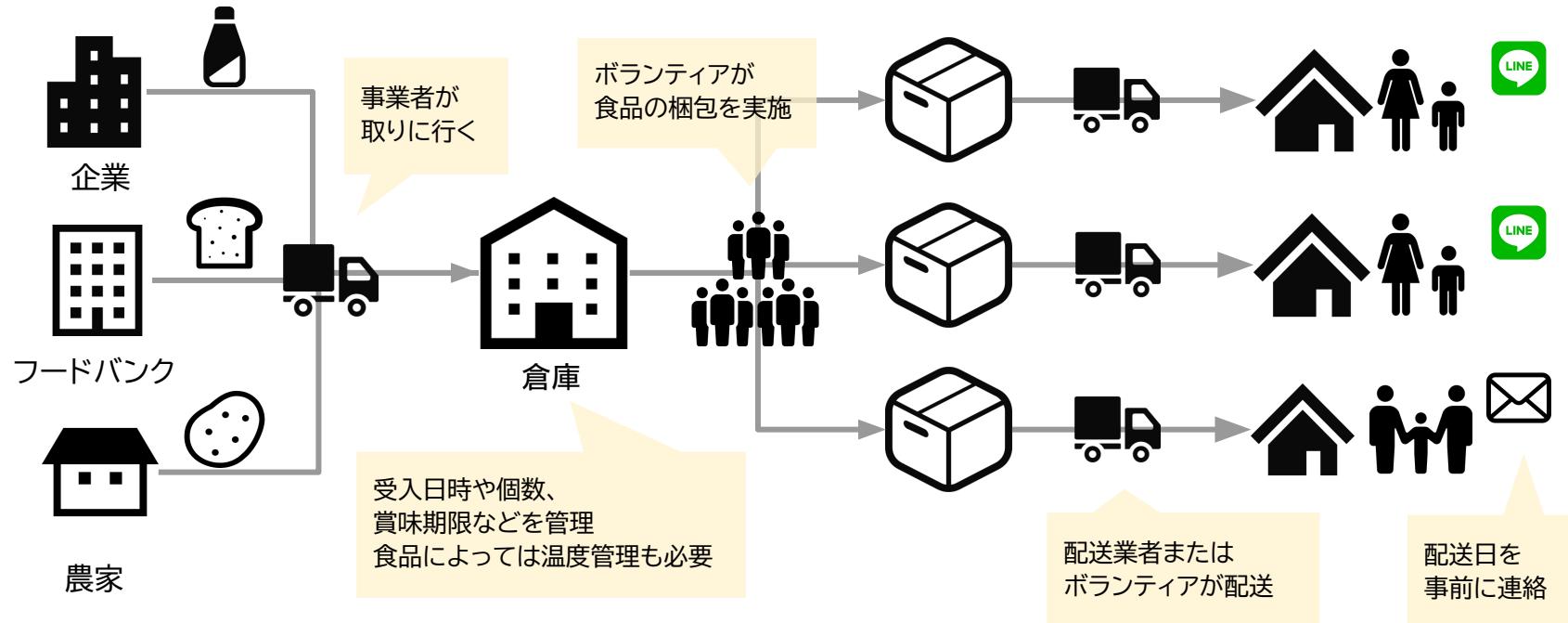


相談など



農家や企業、フードバンクから寄付で頂いた食品を倉庫に保管。

配送前に梱包して個別に配送するのが基本の流れ。





実際にこども宅食で出会ったご家庭

こども宅食で出会った家庭とその課題

使える制度を知らない家庭

- 小学生の子どもと二人暮らしのシングルマザー。
失業し、失業保険と貯蓄を切り崩し生活 していた。
- 長期に派遣職員として就労、正職員との格差などに悩む。
生活費や将来が不安であると「こども宅食」に申し込み。
(=最初は単なる食料支援として申し込んだ)
- こども宅食の利用後、支援員と相談し「高等職業訓練促進給付金」制度を利用し**看護学校への進学**を選択。

行政情報だけでは把握できない困窮

- 庭付きの家、自家用車など、**外からは困窮の問題は無さそうな家庭**。
- 多額のローンを契約、毎月の返済が高額であり、外出、食費や子供の衣類等を節約。生活費の不足をカードで埋める生活だが、夫は「**共働きのだから何とかなる**」と妻の不安を聞き入れない。妻からこども宅食に相談あり。
- 家庭との関係性できたところで家計管理につなぐ。

自分の課題が把握できていない

- 母親に軽度の知的障害がある、ひとり親家庭。** 子どもが3人おり、食事の提供も含め養育が難しい状況。
- 保育所から「子どもが食べていない様子なので、様子を見に行ってほしい」とこども宅食事務局に紹介があった。
- 本人は、自分ではきちんと自活できているという認識。**
- 定期的なこども宅食の接点を通じ、家事支援や手当の手続、子どもたちを学習支援などにつないだ。

行政への拒否感が強い

- 妻は若く、夫は障害があり仕事をしていない。
- 児童相談所に子供が保護された経験などもあり、**行政に対する拒否感・怒りが強い**。新たに子どもが生まれた際も、保健師の訪問も拒む。
- 民間団体のこども宅食は抵抗感があまりなく、訪問を受け入れる。こども宅食を通じ、家庭との定期的な接点を維持しながら、見守りをしている。

2. 親子を取り巻く社会構造とそこから生まれる課題

対象世帯の状況

①「経済的な困窮」にあり、かつ、②「SOSを出す力が高くない」

親子の状況①

顕在化した **経済的困窮**



かつ

親子の状態②

SOSを出す力が高くない (援
助希求力が低い)



「経済的な困窮」に着目する理由



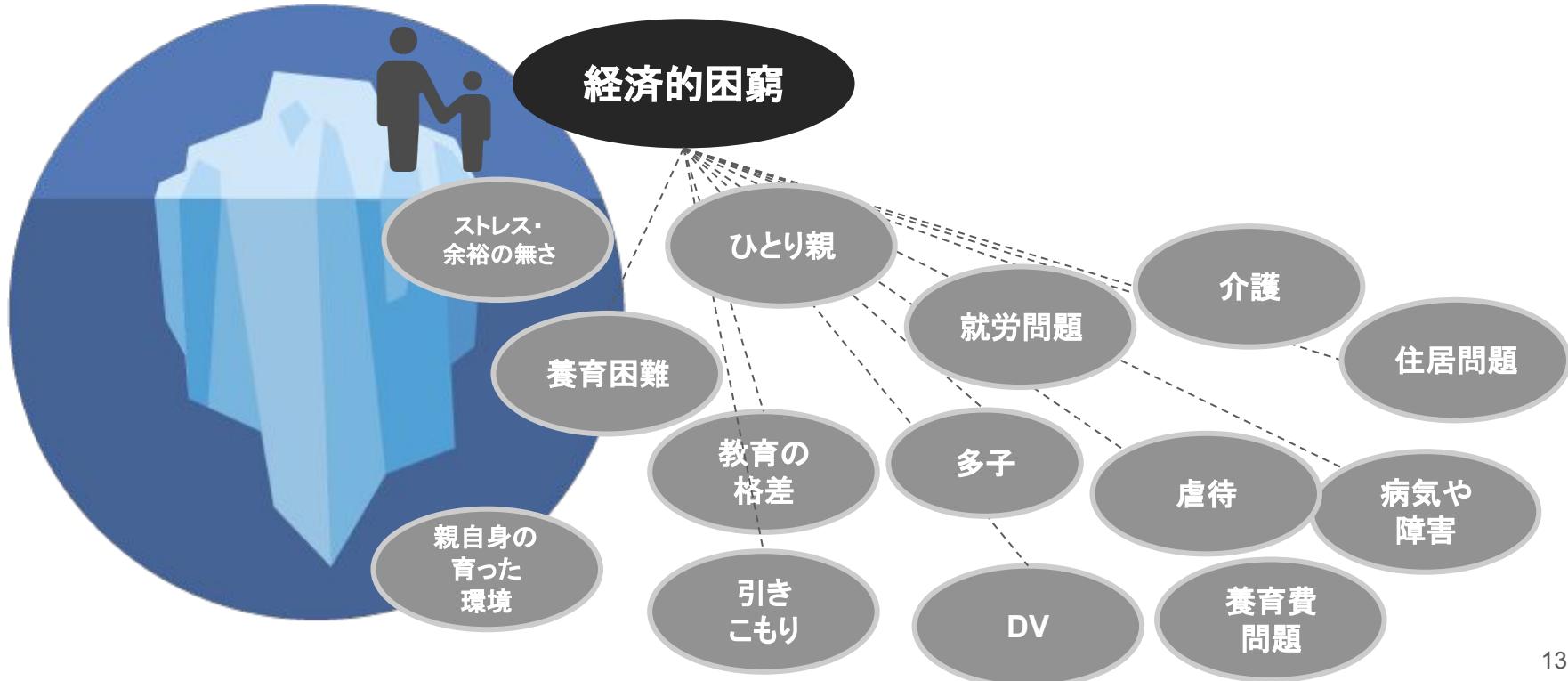
日本の子どもの**7人に1人**が 相対的貧困

その国の文化水準、生活水準と比較して困窮した状態。
等価可処分所得※の中央値の半分(貧困線)に満たない世帯。

日本の場合、等価可処分所得**122万円以下**が相対的貧困世帯。

※世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得

「経済的困窮」は 氷山の一角 にしか過ぎず、見えていない様々な困りごと(課題)が 絡み合って存在している場合がある。



「援助希求力」に着目する理由

全国の「こども宅食」の活動から、親子の状態が見えてきたSOSを出す力(援助希求力)

SOSを出す力	具体的なイメージ
一定ある	<p>困っていることは自覚している。</p> <p>もともとは、支援が分かれれば、自分で一定は動くことはできる。</p> <p>しかし、そこまでの時間的余裕が無い、不安感で将来について考える心の余裕が無いなどの状況では、なかなか動けなくなる。</p>
少ない	<p>困っている自覚はあるが、</p> <ul style="list-style-type: none">支援を受けて過去に嫌な思いをした、相談に反対する家族がいるなど、心理的ハードルがあったり、情報を探すのが苦手、手続で煩雑だと諦めてしまうなど <p>窓口紹介や情報提供のようなきっかけに加え、動き出すための気持ちの準備や、支援を受けるための”支援”が必要な場合がある。</p>
とても低い	<p>困っていることに自覚できていない、</p> <p>過去の経験で、行政や支援に対して拒否的・不信感を持つ、など。</p> <p>関係構築をしながら、専門職も含め、働きかけないと支援につながりにくい。</p>

経済困窮によって援助要請の抑制が起きる

経済的困難を抱える単身中高年男性の援助要請はどのように抑制されるのか:将来展望意識に着目して

(日本心理学会 第85回大会)

東京都A区在住の50代～70代の単身者4,000人(回収率1829票:46%)

1

男女ともに経済状況(現在)が苦しいほど

他者への不信が強まり、それにより援助要請が抑制される

2

単身中高年男性では経済状況(現在)が苦しいほど

将来への諦めが強まり、それにより援助要請が抑制される

3

単身中高年女性では経済状況(現在・子供の頃)が苦しいほど

自己解決の意識が強まり、それにより援助要請が抑制される

支援が届きにくいのは、様々な障壁や制約が存在するから



情報の伝達、手続の複雑化

とにかく自治体の支援の情報もこちらから調べないと分からぬし、支援自体が少なすぎる。

日本語が不自由で書類を書くことができない。
手續が面倒でサービス利用を諦めたことがある



心理的な障壁(拒否感・警戒感)

昔、支援を受けたときに嫌な思いをしたことがあって。もう関わりたくない。

家計も赤字だし、子育てもうまくできていないし、人に知られたら「親として失格」と思われるのでは



本人による課題認知の不足

自分たちは困っていない。
(困っていることに気付いていない)

経済的に困窮しているが、中長期的な見通しが立てられない。何をどうしたらいいか、分からぬ。



物理的な制約

仕事を掛け持ちしながら子育て。
平日の昼間に窓口に行く余裕がない。

フードバンクやこども食堂に行きたくても、ガソリン代や駐車場代を出すお金の余裕がないです。

困っているのに支援や相談にたどり着かない



相談先が分かるか、探せるか？

窓口に行けるか？
物理的・心理的

手続ができるか？

ここで
待ってます
自力で
来てください



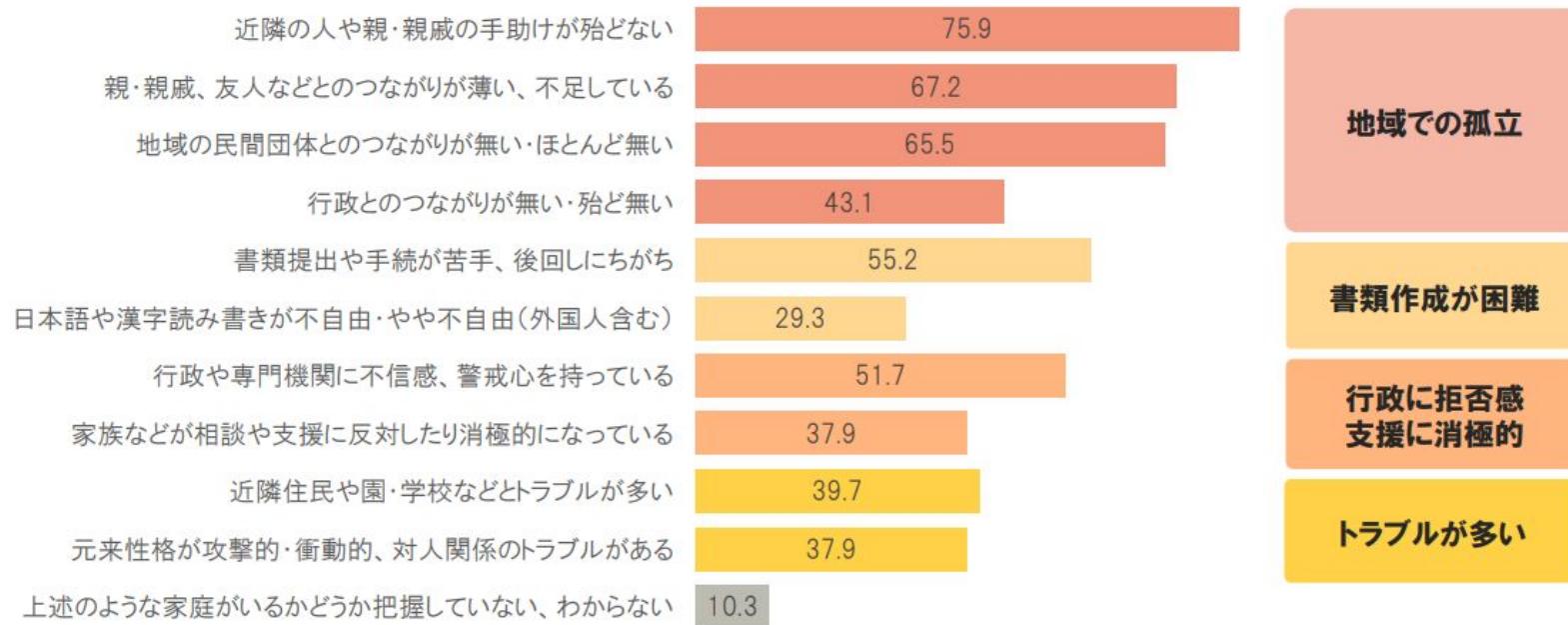
支援機関など

これらの障害を乗り越えた人だけが、支援を受けられる構造にある

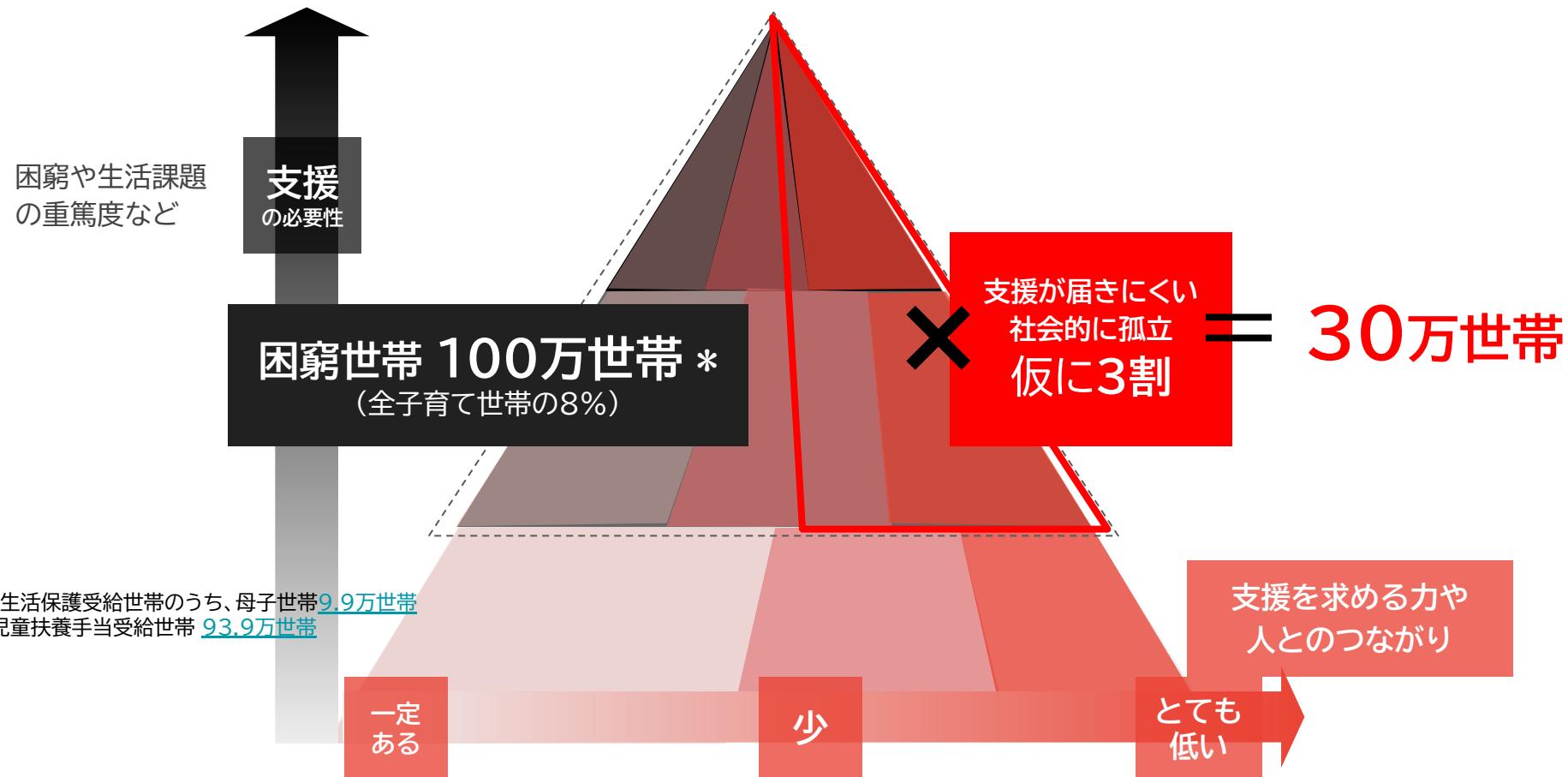
課題を抱えている家庭

ほとんどの地域に、孤立している、行政や支援に対する抵抗感がある、申請手続きの難易度が高いなど、多様な事情を抱える、支援につながりにくい家庭がいること明らかとなった。

特に以下のような課題を抱える家庭が利用家庭の中にいますか。いる場合は、あてはまるものすべてお選びください。（%）



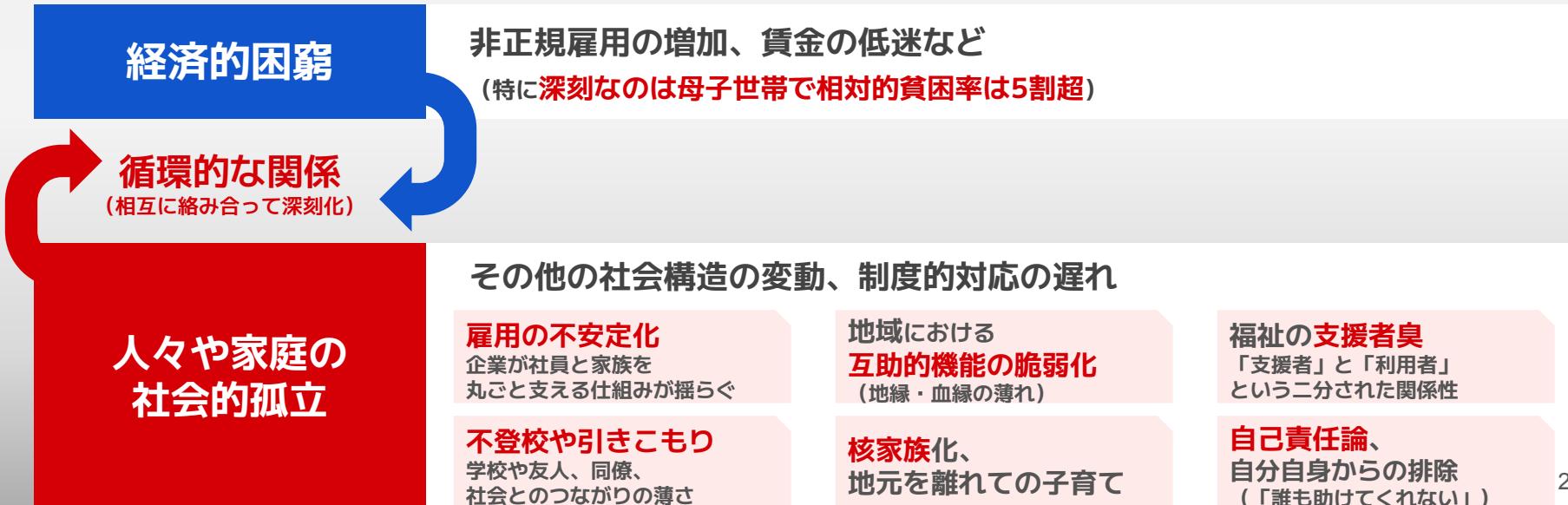
持つべき視点：「いま日本で、適切なサポートが届かない家庭がどのくらいの規模いるのか？」



スティグマを引き起こす「自己責任論」について

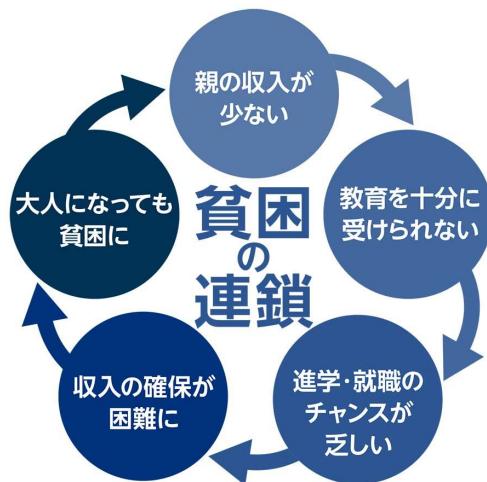
親子が置かれている社会の構造

先行する議論や研究では、“社会的な孤立”と経済的困窮が互いに絡み合って深刻化することが指摘されている。“社会的な孤立”は、社会構造の変動や制度的対応の遅れなどの要因から生じており、本人側の状態だけに着目しても事態は変わらない。



非正規雇用の増加、賃金の低迷など

- ✓ 貧困は次世代に連鎖する
子どもは自分の生まれる環境・育つ
を選べない



- ✓ こどもの貧困を放置した場合、1学年あたりでも経済損失は約2.9兆円に達し、政府の財政負担は1.1兆円増加するという推計結果

	所得	税・社会保障の 純負担
現状シナリオ	22.6兆円	5.7兆円
改善シナリオ	25.5兆円	6.8兆円
差分	-2.9兆円	-1.1兆円

地域における互助的機能の脆弱化（地縁・血縁の薄れ） 核家族化や、地元を離れての子育て

- 母親自身が育った市区町村以外で子育てをしている 7割
- 子どもを預かってくれる近所の人がいない 6割



※N P O 法人子育てひろば全国連絡協議会「地域子育て支援拠点における「つながり」に関する調査研究事業報告書」（2017年）
(全国の地域子育て支援拠点事業を運営する団体（計240団体）の利用者について、各団体において任意の開所曜日・時間に1拠点あたり10人程度に無作為配布するよう依頼し回答を得たもの（有効回答数1136人）)

3. こども宅食の目的

利用家庭に生み出したい "変化" (成果)

実際の事例



シングルマザー家庭。
母親は**精神的に不安定**な状況。

外に出られる状況ではなく、
仕事もほとんど無いため困窮状態。

こどもは小学校で不登校になり、
親子ともに社会から孤立していた。



実際の事例（つづき）

こども宅食をきっかけに、継続的に家庭を訪問。そこから次の支援につなげる

（支援世帯の変化）

①：家庭とつながる

- ・ 子どもの幼稚園から、支援団体に見守り依頼があった
- ・ 宅食団体が「子育て中のママを応援するため」のお弁当配達という入口から接点を持ち始める（受け入れやすい支援の入り口を設定）

②：家庭の状況を把握する

- ・ 最初は警戒されていたが、家庭訪問を繰り返し、表情や会話の中で状況を把握しながら信頼関係の構築に努める
- ・ 半年ほど経って、ようやく家の中に入れてもらうと、中はゴミ屋敷の状態。外から見えない家庭の困りごとに宅食団体が気づけた

③：必要な支援につなげる

- ・ 行政の担当者につなげ、行政サービスの登録手続きを支援
- ・ 自団体の家事支援につなぎ、一緒に家の片付けを行う
- ・ その後、こどもの不登校が解消し、母親も安定した仕事探しへの一歩を踏み出すことができた

地域の社会資源の中での「こども宅食」の位置付け・機能

「こども宅食」の事業の範囲

成果1

課題を抱える親子と
つながる

事業周知・
申込みの誘引
(家庭の発見)

成果2

課題を抱える親子を
みまもる

関係構築、
課題や状況把握

本人の
行動変容を
促すサポート

成果3

地域の社会資源へ
つなげる

情報提供や
社会資源への
つなぎ

地域の社会資源

成果4

ニーズに合った
社会資源

専門的な相談支援や
地域の居場所・
市民サポートなど



食支援 = つながるフック

食支援 = 定期的な接点



どんな先につないでいるのか？

相談、問い合わせの内容

教育や進学に関する相談や生活用品など必要なものに関する相談が多い。直接的な悩みごとだけではなく、行政の支援に関する手続きについての問い合わせも多い。

これまでに、利用家庭からの相談や問い合わせはありましたか。あった場合は、その内容についてあてはまるものをお選びください。



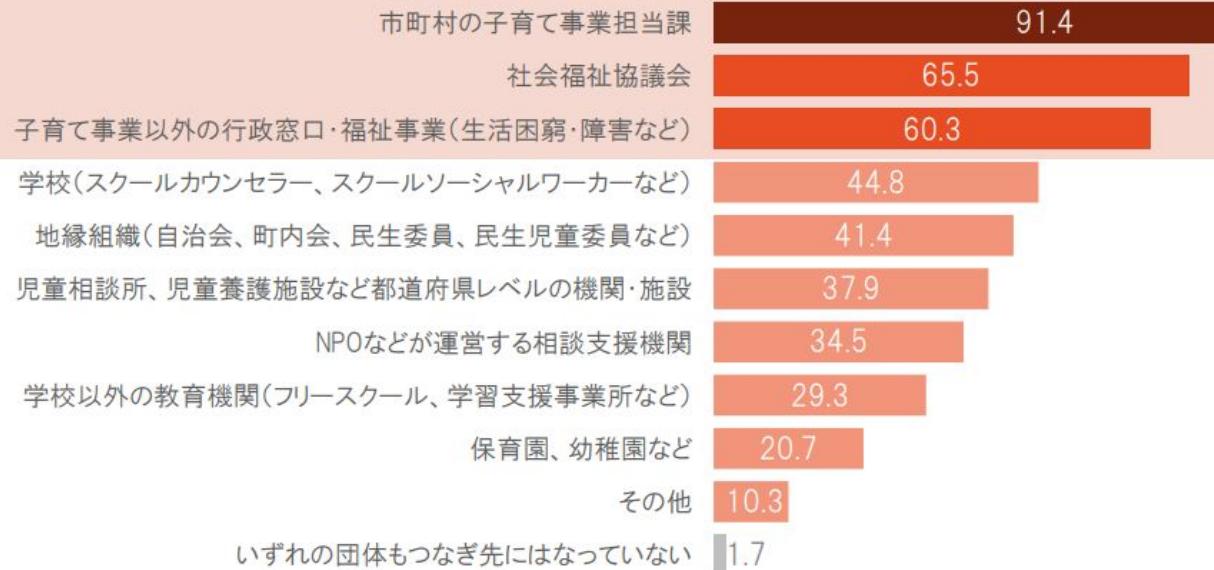
支援のつなぎ先との連携体制

9割の団体が、自治体の子育て事業担当を支援のつなぎ先にしている。

次いで、社協や子育て事業以外の行政窓口となっている。

こども宅食事業を実施する中で、利用家庭に対して何らかの支援が必要になった場合の
つなぎ先になっている団体として、あてはまるものをすべてお選びください。

(%)

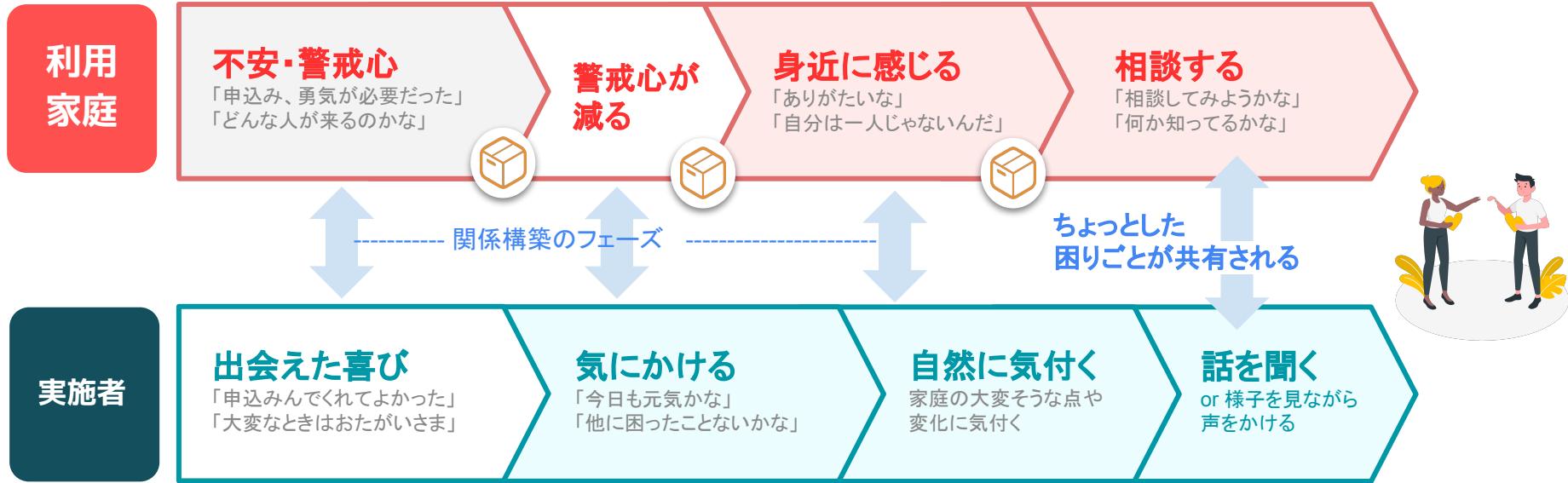


「相談・支援につなぐ」だけが成果か？

定期的な訪問を通じて、少しづつ関係が深まり
「誰かに相談してもいいんだ」と思えるようになる。



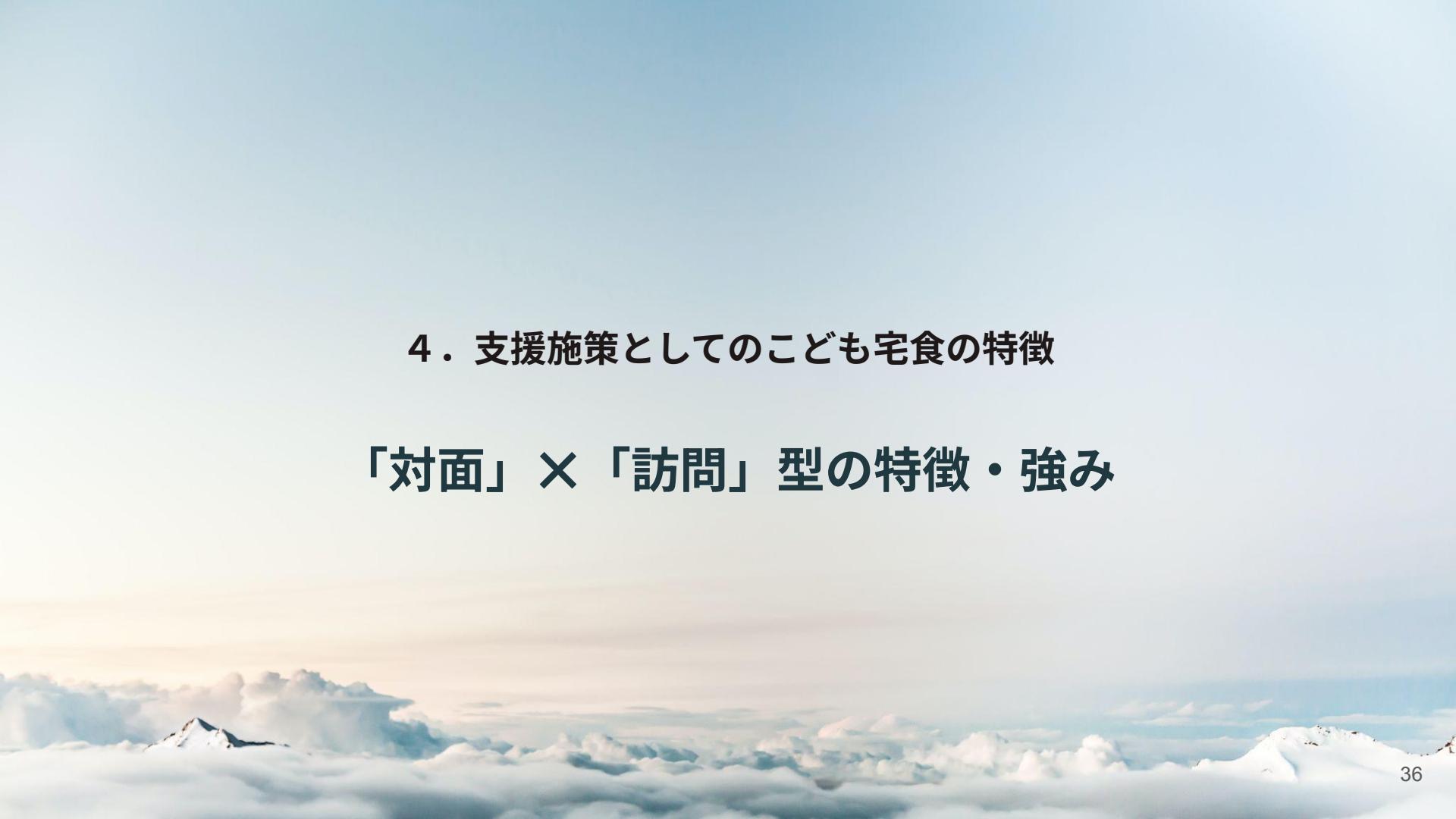
これまで孤立していた家庭に、「困ったときに相談できる」身近な人ができることも成果の一つ



Q.こども宅食を利用することで、どのような変化が生まれましたか？



こども宅食利用家庭に関する実態調査(n=354)



4. 支援施策としてのこども宅食の特徴

「対面」×「訪問」型の特徴・強み

特徴①

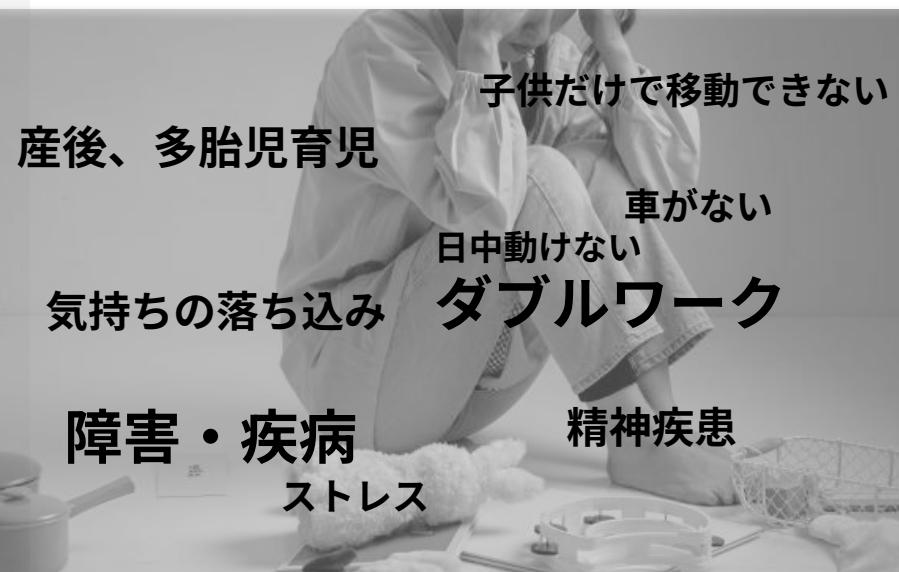
支援を受けに物理的に場に出てこれない親子がどの地域にも必ず存在し、そこにもリーチできる（※もちろん「DV避難中で自宅を知られたくない」等の人もいるので万能ではない）

過去調査※：約3,000世帯のうち、444世帯・約14%

「外出が困難になるような障害・
疾病がある」と回答*



※n=3,173家庭（2021年8月の神戸こども宅食に申込んだ家庭）



特徴②

孤立している家庭は、そもそもたくさん的人がいる居場所に出て来ない（出会えない）。こども宅食のような「個別性」の高い支援が届きやすい。



「ウーバーイーツしています。」 <https://umau-llc.localinfo.jp/posts/35792526/>

- ひとり親等への居場所事業を行う福岡のNPO umauさん
「活動当初は、食事や食材などは、居場所に来て受け取つてもらう形からスタートしました。
しかし、**人の集まる場所に行くことが苦手な方**がいるので、届けをすることの大切さ、必要性が高まりました」
- もともと食堂を運営していた金子先生
「食堂と比較し、こども宅食は、『少数の人と接すればよい』、『最低限の会話で済む』という特徴がある。良い意味で<閉じている>事業。
周囲の目が気になる人や、コミュニケーションが苦手な人でも最初の入り口として利用しやすい」

特徴③

対面訪問では家の様子・子どもの表情などの非言語情報が自然と入る

見守り強化事業(XX便) 訪問時チェックリスト

訪問日 令和 年 月 日		
利用者名 ()	訪問者 ()	
項目	チェック内容	<input checked="" type="checkbox"/>
お届け状況	自宅で手渡し	
	事務所で手渡し	
住まいの状況	きれい	
	ふつう	
	散らかっている	
子どもの状況	不自然な怪我やアザ	
	体調不良（病気の治療中）	
	表情が乏しい	
	極端に無口	
	大人の顔色を窺っている	
	親への近づき方、距離感が不自然	
	服装、身だしなみ（不衛生な状況）	
保護者の状況	体調不良（病気の治療中）	
	表情が乏しい	
	極端に無口	
	感情や態度が変化しやすい	
	余裕がないように見える	
	子どもへの近づき方、距離感が不自然	
自由記述		

ある社協での宅食で、ボランティアが
使っているチェックリスト

各地の実際の事例



不登校の子ども。物資を届けに行った際には
顔を見せてくれ、自分の好きな食べ物が入っているか、物資
が入っている袋の中を嬉しそうに見ている姿 があった。受
験についても話すことができた。



お母さん自身が体調不良になり仕事を辞め、
自宅で仕事をしていたが不安定な状態であり、
宅食がとても助かったと言われていた。
現在は就職も決まり、子どもたちの
表情が以前より明るくなっていた。



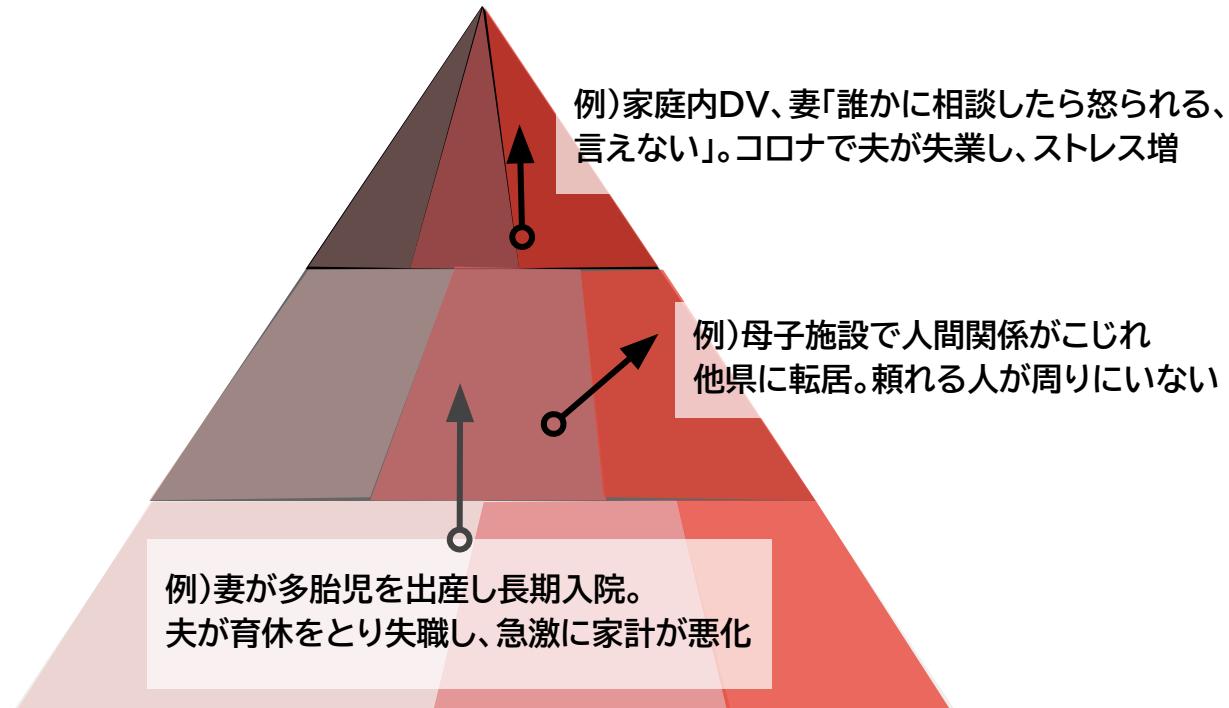
実際に訪問してみると、元々の養育力の低さや母の病気、
コロナによる収入減により食事にかける優先順位が
下がっており、一日1食食べられたら良い方。
家の中も混沌としており、とても子どもが
安心・安全に暮らせる環境とは言い難い状況 でした。



コロナ禍、母親が職場を解雇され
家庭にずっと居ることに。公営団地の
あまり広くない住居に、親子 3人が
時間を共有 することが多くなり(1人は
不登校で在宅)煮詰まり状態 になりました。

特徴④

家庭の状況は変化するため、ある時点だけ接点があっても、変化や悪化の兆候に気づくことは難しい。予防が難しい → つながり・信頼関係を継続的に維持する仕組みの一つが「こども宅食」



低年齢層へのアプローチ

○ 子どもの虐待死の年齢割合

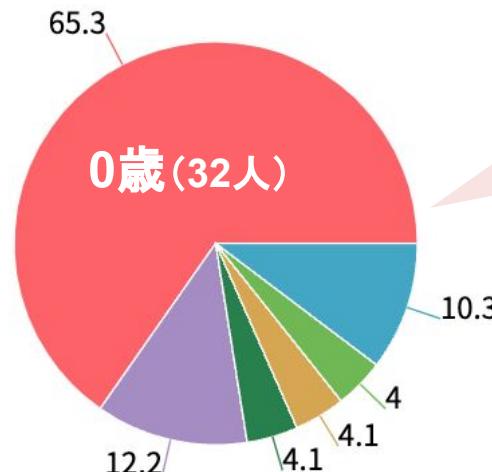
例年同様0歳が最も多く、うち月齢0か月が高い割合を占める。

0歳：32人 (65.3%) ※1～13次：313人 (46.2%)

うち月齢0か月：16人 (50.0%) ※1～13次：143人 (45.7%)

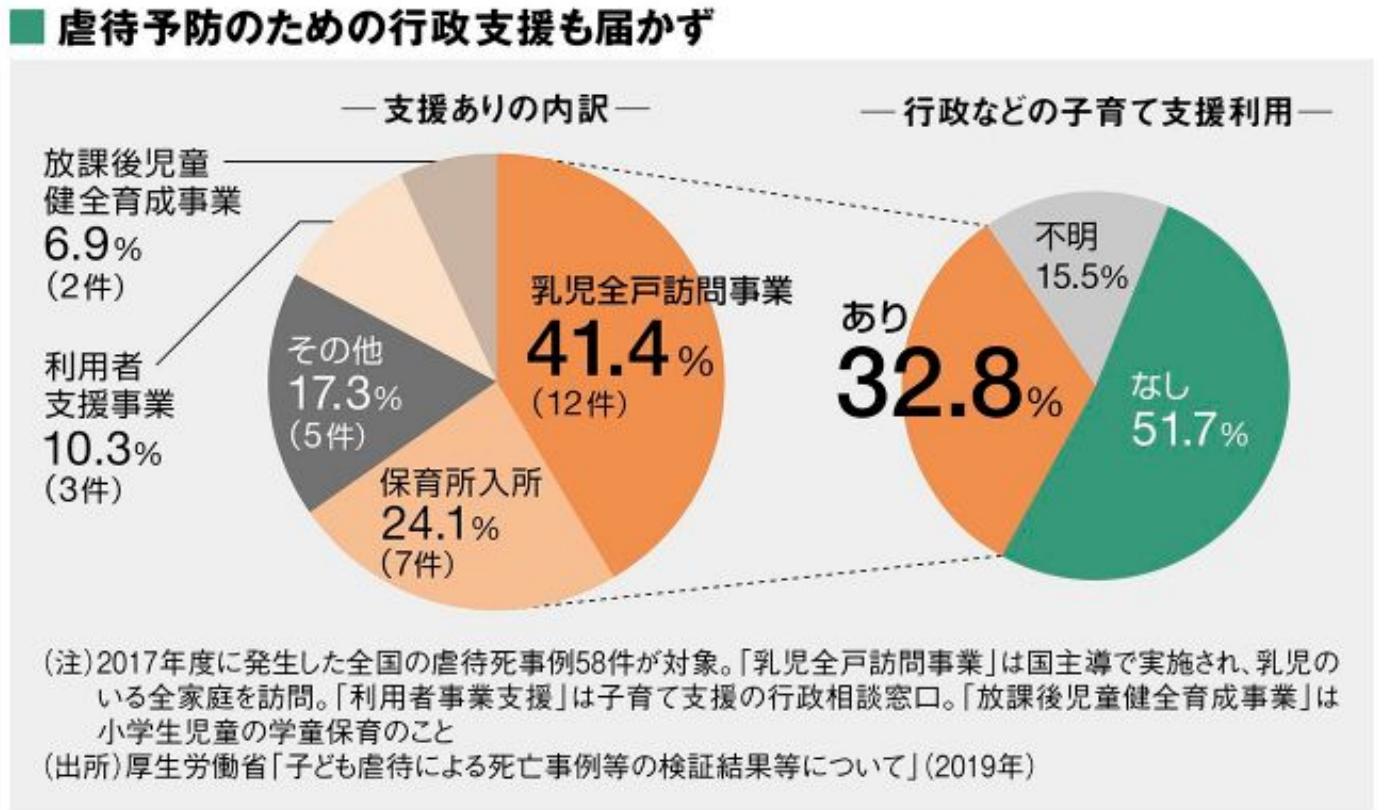
死亡時点の子どもの年齢（心中以外の虐待死）

■ 0歳 ■ 1歳 ■ 2歳 ■ 3歳 ■ 4～10歳 ■ その他



うち月齢0か月：
16人 (50.0%)

必要な人に、支援が届いていない現状 (虐待死ケースの半分は「子育て支援利用なし」)



対象世帯

佐賀市こども家庭課（健康づくり課）が妊娠届や妊婦訪問、乳幼児全戸訪問事業などで見守りがあったほうが良いと判断した家庭

妊娠・出産・育児
が不安

生活困窮

若年層

相談する人が
いない



みまもるアクション

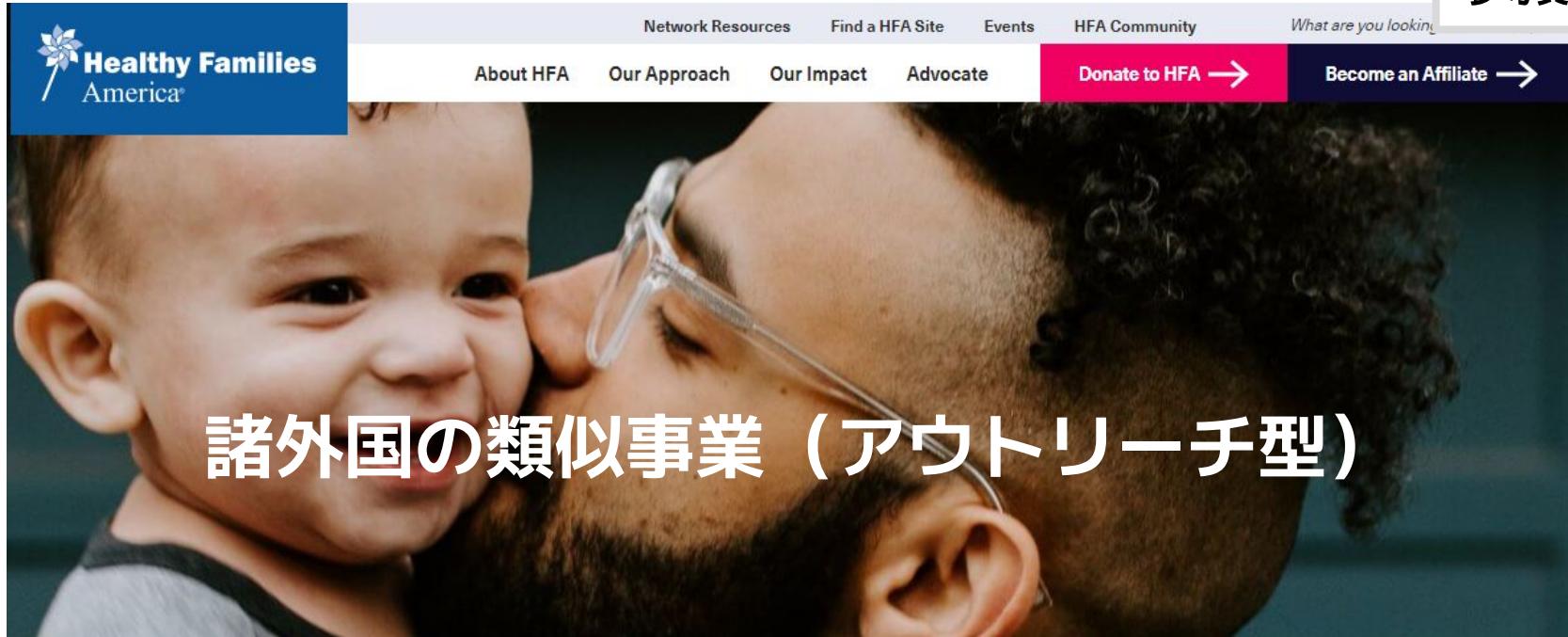
2回目からは
月に1回程度、
無料でオムツや
ミルク、離乳食等
を持って訪問



不安や悩みを
傾聴し、
必要な情報提供
見守り支援を行う



経済的支援とみまもる支援で孤立をふせぐ



Healthy Families America

Network Resources Find a HFA Site Events HFA Community What are you looking for?

About HFA Our Approach Our Impact Advocate

[Donate to HFA →](#) [Become an Affiliate →](#)

諸外国の類似事業（アウトリーチ型）

Healthy & Happy Relationships

For nearly 30 years, Healthy Families America (HFA) has worked toward a singular vision: all children receive nurturing care from their family that leads to a healthy, long, and successful life.

[Learn about Our Approach →](#)

全米で導入が進む児童虐待防止のための家庭訪問プログラム(HFA)の研究:

「既に虐待やネグレクトなどの問題が発生している場合は専門家による介入的な指導も必要。しかし、予防的な支援では親の能力を認め、親自身が自ら育っていくのを支援する方法が有効」

家族の強みに着目しそれを積み上げていく 支援方法(Strength Based Approach)

- ・親と家庭訪問員がパートナーシップを結ぶ
- 家庭訪問員は

 - ・親の欲求・ニーズに焦点を置く
 - ・親の能力（ストレングス）の上に積み重ねるよう支援する
 - ・家族が自分の目標に到達するのを支援する

専門家が問題の改善に取り組むよう指導する 方法(Deficit Based Approach)

- ・家庭訪問員が「専門家」という立場を保つ
- 家庭訪問員は

 - ・家庭内・子育ての仕方などに何が問題かに焦点を置く
 - ・家庭訪問者が問題の原因を見つけ出す
 - ・家族は問題をどのように「直さねばならない」かを「指導」される